

解説

東京都庭園美術館 学芸員

田中美穂

本史料集は、江戸東京博物館が所蔵する『菊花壇養種』（資料番号12200055）を翻刻したものである。本書は、菊の栽培方法を多くの図版を駆使して具体的に解説し、文字には丁寧なルビを付すなど、広汎な読者層が想定されており、当時の菊栽培のひろがりを予見させる作品となっている。江戸東京博物館では、本書を江戸時代後期の園芸文化の在り方を示す資料として、平成二五年（二〇一三）開催の特別展「花開く江戸の園芸」において展示した。

江戸時代には多くの園芸書が刊行されたが、複数の植物の栽培方法を、土壌や肥料などの種類や適性と共に紹介する総合的な内容と、一つの植物における品種や栽培方法に限定した内容とに大別される。『菊花壇養種』はその名称の通り後者であり、菊を栽培するために必要な条件と技術、種類を解説する。江戸時代後期における菊栽培と人々との関わりを垣間見ることが出来る好資料である。

1 書誌情報

寸法 縦一八・八cm × 横一二・〇cm 全三五丁 墨刷

青色の表紙・裏表紙の一面には、菊の模様が施されている。外題は「菊花壇養種 全」、上下に菊の花があしらわれた見返しの内題に「菅井菊叟著 菊花壇養種 東都書肆 甘泉堂梓」とあり、柱題は「菊花壇」と

のみある。著者は菅井菊叟、版元の甘泉堂は、芝三嶋町に店を構えた地本双紙問屋、和泉屋市兵衛。刊年は序文・跋文にある弘化三年（一八四六）を採っている。本書の特徴は、菊の栽培方法を豊富な図入りで解説した点にあるが、それらの挿絵を描いたのは、画中の署名から溪斎英泉（二七九一～一八四八）によるものと知られる。著者の菅井菊叟の事跡は未詳ながら、序文の署名にある「東都楓川市隠」、「一筆庵主人」がいずれも溪斎英泉の号であることから、本書の作者菅井菊叟も溪斎英泉のことであると推測される事が多い。跋文を誌したのは、玉英舎主人とあるが、残念ながら、この玉英舎の事跡も未詳。著者菊叟を師と仰いでいるが、記述の範囲では絵画の師であるのか、菊作りの師であるのか判断としない。しかしいずれにしろ作者を英泉と推定することを妨げるものはない。したがって本書では、絵師溪斎英泉が序文・本文・挿絵を手がけた作品であるとする先行研究を承継しておきたい。

本文の冒頭に「菊花壇養種 初輯」とあり、かつ文中に「初輯に漏れる事は後輯に次で誌す」とあるなど、執筆段階では後輯の刊行が示唆されている。しかし外題には「菊花壇養種 全」とあり、刊行段階で後輯の刊行は断念されていたようである。実際に現在も後輯の存在は確認されていない。初輯刊行の二年後の嘉永元年（一八四八）、溪斎自身が没したこともあり、後輯の刊行は困難であったと思われる。

2 江戸時代の菊について

(1) 弘化三年における菊と人々

『菊花壇養種』が刊行された弘化三年（一八四六）頃は、巢鴨や染井をはじめとした植木屋の庭に設けられた菊花壇が、秋の風物詩として、

人々の人気を集めていた。往時の様子は、菊池貫一郎著『絵本江戸風俗往来』に次の通りに記される。

菊見 天保以後は菊人形を造り飾り、見物と呼ぶこと絶えて止みにけり。ただ花壇菊は益々念を入れて見事に造りたり。染井・千駄木辺なる將軍家御用の植木師、諸侯方御出入の庭園師は、屋敷地所も殊の外手広く、木石等もいみじき名品多く、庭樹の手入れも全く行き届ける。園中に花壇菊の培養をなし、金銭に閑せぬ技倆を示して仕立てる花にて、その見事なること、目を驚かせたり。されば好みにて菊花を愛する客には、閑静にして賞するに堪えたり。

花壇菊（菊花壇とも）については、本書にも「菊花壇花盛りにして愛翫する」とあり、紙の花受で整えられた大菊に人々が集う様が描かれる。

（二〇頁）題名からして『菊花壇養種』である本書の内容は、「此策子は、当世の洋菊を花壇に作る事を委しく誌せり。」（五頁）から本文が始まる通り、主として大菊の栽培方法である。菊の花そのものを好む層にとつては、丹精を込めて栽培された菊花と向き合える花壇菊が支持された。

菊への関心として、八世紀に中国から渡来した際に、共に伝えられた「隠逸」を象徴する存在とする文人流や、珍しい種類に高値を付け、投機の対象とするものなどがある。特に後者は、未見の種を作出するため実生栽培を行い、また、花合という品評会^{はなあわせ}で高評価を得るべく、大菊・中菊の栽培に精根が傾けられた。品評会の結果による様々な反応を、小林一茶は、「勝った菊大名小路通りけり」「負け菊をひとり見直す夕べかな」と詠んでいる。実生による菊の種類は増え続け、岩崎灌園著『草木育種』（文化一五年・一八一八年）によれば、「菊の種類は実ばへにて年々花形変故、その数を知らず。」の状態であった。

一方、天保（弘化年間には、大量の小菊を使用した「菊人形」「菊細工」が造られた。天保一五年（一八四四）の「造花一覽園百菊」では、文化年間における流行を惜しんで、菊細工を手掛ける植木屋と、その内容を一覽にしている。また、菊細工の見物を容易にする案内図なども発行され、人々の関心の高さが伺える。花期が長く、茎がしなやかに曲がる菊は、人物や動物、舞台を再現した造作を飾り立てる花としては最適であり、他の植物にはない特徴である。その出来映えの見事さや珍しさは大勢の人気を集め、錦絵の恰好の題材となった。

(2) 江戸時代における菊の著作について

ここで、江戸時代における菊について主な著作を掲げる。内容を図譜・概説（効能含む）栽培その他と大別した。

 「きくの百花」 伝土佐光起 貞享元禄

 『菊譜百詠図』 貞享三年（一六八六）

※一四五八年に中国で出版された『菊詩百篇』の翻刻版。日本で最初の菊の園芸書とされる。

 『花壇綱目』 水野元勝 延宝九年（一六八二）

 『菊ノ画譜』 伝武林唯七 元禄三年（一六九〇）

 『画菊』 建仁寺潤甫 元禄四年（一六九一）

 『花壇地錦抄』 伊藤伊兵衛三之丞 元禄八年（一六九五）

 『花譜』 貝原益軒 元禄九年（一六九六）

上代より名を得たり。郡花にをくれて晩秋にひとりひらきて百

花と春をあらそはざるにや。色香かたちともにすくれてめでたきもの也。誠に花の上品とすへし。詩歌に多く詠しからやまといにしへ今人のあまねく愛するもむべなり。

菊花を食すれば養生の上薬とす、身をかるくし年をのぶるよし、本草にしるせり。

- ㊦『千代見草』 西京園丁 元禄一二年（二六九九）
- ㊦『百菊図巻』 三仲斎蘭窓 元禄一七年（二七〇四）
- ㊦『菊あわせ』 正徳四年（二七一四）
- ㊦『花壇養菊集』 清水閑事 正徳五年（二七一五）
- ㊦『画菊集』 湯口謙甫 正徳五年（二七一五）
- ㊦『江戸菊会』 享保三年（二七一八）
- ㊦『京新秋菊惣割苗帳』 享保三年（二七一八）
- ㊦『扶桑百菊譜』 児 素仙 享保二〇年（二七三五）
- ㊦『菊経』 松平頼寛・『菊経国字解』 白土盛隆 宝暦五年（一七五五）
- ㊦『草木育種』 岩崎灌園 文化一五年（二八一八）
- ㊦『養菊指南車』 秀島英露 文政二年（二八一九）
- ㊦『菊花壇養種』 菅原菊叟 弘化三年（二八四六）

こうして見ると、江戸時代を通して関連の書が存在しており、菊が普遍的な支持を得ていたことが分かる。早い時期では、色形が異なる菊をまとめた画譜が主であるが、一七世紀後半には、栽培方法や品種を解説した園芸書『花壇綱目』『花壇地錦抄』が登場する。

一八世紀前半には、花合の結果による菊の名前が、『花壇養菊集』『江戸菊会』『京新秋菊惣割苗帳』に記録された。各人が所有する植物の出

来映えや珍しさを競う品評会が、菊の場合は他よりも早く行われている。

好事家による評価や投機、また、人々の鑑賞の対象として、菊は育てるだけではなく、正確かつ美しい作品でなければならなかった。また、栽培期間が春から秋と長いため、作業量とそれに伴う道具が必然的に多くなる。そのため、他の植物に較べて菊の栽培方法の解説は、概して長文である。

このたびの『菊花壇養種』は、江戸時代における菊の著作のうち、かなり後発ではあるが、その分、先達の園芸書を参照しながら（五頁）、大菊の栽培と花の整え方、品種ごとの花卉の違いなどを分かりやすく解説、図示しており、現代における菊の栽培にも通用する内容となっている。

3 『菊花壇養種』について

(1) 栽培のあらまし

本書の主な目的は、花壇に作る洋菊（以下、大菊とする。）の栽培であり、栽培に必要な土作り・播種・根分・整枝・害虫駆除などの作業を解説している。その前に、菊にまつわる菊慈童の伝説や、重陽の酒宴、菊花への綿かぶせなど、いずれも菊の露が不老長寿に効能があり、その香は邪気を祓い清めることを紹介している。

菊の栽培は、寒中における土作りから始まる。この作業は本書が刊行されて約一七〇年を経た現代でも変わらない。作り方として、通気をよくし湿度を嫌う菊のために、黒ぼく土に赤土を混ぜ、さらに人糞や糠を入れ、約五〇日間保管する。その間に天地返しを二回程行うとある。特に種蒔きから栽培を始める場合には、土作りを第一としているが、当時

でも場所と手間を要することから、大都会江戸ならではの手段として、「植木屋に貯え置肥土を買入ても可也」を勧めている。

土作りから始まる菊の栽培には、ほぼ一年間を要する。菊の生長期は春から秋であり、厄介なことに虫の活動時期に一致する。そのためか、松平頼寛・白土盛隆『菊経国字略解』では、菊の害虫を凶で表し、観察と駆除の助けとしている。虫の害は菊の価値を著しく下げることから、栽培用の土は、菊虎（キクスイカミキリ）の卵と幼虫を警戒して、前年の栽培に使用した土は使わずに、「培養を第一とす」としている。害虫の駆除については、石灰水や捕殺の他に、「なまこは虫を除くものなり」とあるが、この方法は、岩崎灌園『草木育種』にて、草木の根を掘り上げる害をなすモグラへの対抗策として、「又妙法あり。海參を切て所へ埋置バ、遠く逃去ると云。なまこハ虫を除くものなり。」とあり、それに倣ったのだろう。また、かつては小正月の行事として、ナマコを藁で包み、縄で引き回して、土中のモグラを牽制する「なまこ曳き」「もぐら曳き」が行われていた。

その他、菊の一覧として、水野元勝『花壇綱目』に掲載の七九種を記載するが、(三二―三七頁)中には「中輪」「小輪」もあることから、『花壇綱目』が著された一七世紀後半には、花の大きさによる種別が厳密に行われていなかったと考えられる。ここで一旦「菊花壇養種 初輯」が終了するが、掲載した栽培の事例は江戸によるため、他地域の場合や、「挿花に数日菊花を保存する事」「正徳年中菊合の流行し事など、初輯に漏たる事は後輯に次で記す」とあるが、後輯の存在については認められていない。

また、当世における菊として、二八の名があるが、(三九―四〇頁)

いずれの説明も色のみであることから、すべて大菊と考えられる。『花壇綱目』と本書に共通する菊の名前として、「玉牡丹」があるが、前者は「大輪白咲出し 黄色」、後者は「外白 中むらさき」であり、同一品種か否かは定かではない。

続く布袋造りの説明では、「菅井菊叟翁、年頃菊の栽培の事に精密しく、凡高き三尺余にして花の輪差渡し六七寸或は一尺に及ぶ育て方」なり」とあり、菊を草丈約1m、花の大きさ二〇―三〇cmに仕立てる方法である。栽培方法と注意点は、大菊と同じであり、かつ手入れに際しては、「老人ならば眼鏡を係、たすきにて袖の外へさはらぬやうにして、小楊枝の如き物にてみきにすべき苔にさはらぬやうに、廻りのつばみを摘取るべし」。⁸「風雨の防方行と、かざして苔を落し葉を痛れば、数日の手当空しくなるへき事」と、布袋造りに限らない栽培の心構えを説く。特に菊は、蕾の育つ時期が台風の影響と重なるため、雨風除けに念入りな準備が必要である。芽出しや開花の喜びだけでなく、より正確な、より美しい作品としての仕上がりを目指す菊の栽培は、現代にも引き継がれている。

このような心構えが必要な菊については、種の管理にも細心の注意を払う。菊の種はとても小さいため、茎ごと切り離れた花を逆さまにぶら下げておき、用意した苗床や袋への自然落下により、漏らさず集めなければならぬ。その際に品種名を記録しないと、「翌年は必忘る、こと多し」ということになる。種からの栽培＝実生は、その形質が定まらないため、必ずしも前年と同じ内容で開花するとも限らない。その結果、「武者揃」「子渡し」などという極めて主観的な名付けとあいまって、江戸時代において、既に数えきれないくらいの種類が存在するに至った。

(2) 「菊を作養方の画解」について

本書の挿絵は溪斎英泉の手によるが、その一つに、「菊きくを作養方つくえやしなひかたの画解えとぎ」がある。栽培用土の拵えから、開花の準備までの、栽培に必要な作業を、八つに分けて図解している。いずれの場面でも、二人の男性が菊の生長に合わせた作業を、見ようによっては楽しそうに行っている。土作りとその手入れ、苗の水やりと移植、害虫駆除に支柱立てなど、文章だけでは伝わりにくい各作業の具体的な動作を見ることが出来る。

植物の栽培を解説する園芸書においては、対象となる植物を具体的に示す必要がある、その姿形が挿絵として描かれる。同じ種類であっても、品種により全く姿形が異なることも多い植物の解説において、挿絵の重要性は極めて高い。ただし、描かれるのはあくまでも植物や、栽培に必要な道具や設備、害虫が多く、それに関わる人々の姿は殆ど描かれない。その点において、本書における「菊を作養方の画解」は、溪斎英泉の画力もあり、巻末に記された「草木栽培の業に預らぬ者も、秋の楽しみに菊を作り愛る者多き故に、僅に其荒増を誌して好者の一助に備ふるものなり」という目的にかなっていると思われる。

1 磯野直秀は「著者菅井は図を描いた溪斎英泉その人のようにおもわれる」とする(『日本博物誌年表』(平凡社、二〇〇二年)。平野恵も「園芸の達人 本草学者・岩崎灌園かんえん」(平凡社、二〇一七年)において同様の指摘をしている。

2 『絵本江戸風俗往来』(平凡社、一九六五年)の原著は、明治三八年(一九〇五)の刊行。

3 俗世間から離れて隠れ住むこと。古代の中国では、高い見識を持ち、自分の理想を掲げて、公職に就かない人々を「逸民」とし、逸民が人里離れた場所に隠れ住んだことから「隠逸」と呼ぶようになった。菊の別名として「隠逸花」があるが、これは、姿形を隠している、清らかな香りでその存在が知れる、という意味である。

4 岩佐亮二「菊の成立と発展」(社団法人全日本菊花連盟編『菊花譜―園芸文化の伝統とその歩み―』主婦の友社、一九八一年)。

5 一般財団法人雑花園文庫蔵「造花一覧園百菊」

6 山本和美『NHK趣味の園芸 よくわかる栽培12か月 大ギク』(日本放送出版協会、二〇〇一年)。

7 現在(二〇一九年)における菊の布袋作りとは、大量の小菊を使用し、布袋の腹の形を造作する技術のことである。

8 現代ではピンセットを使用する。

9 清水閑事『花壇養菊集』(正徳五年・一七一五)は、京都円山にて、座敷に一輪ずつ並べられた「当世菊花」に、武家や僧侶、庶民が集まる様子が描かれており、菊の花合(菊合)を絵で見ることが出来る。未刊となった『菊花壇養種 後輯』において、「正徳年中菊合の流行し事」の収録を予定していたのも、菊を語るについて、栽培の発達を促した要因として花合があり、その具体的な例としての認識があつたためと考えられる。